

亜矢 令和5年10月度特別作品

「夾竹桃」

亜矢

八月下旬、私は、モーツァルトの歌劇「フィガロの結婚」を鑑賞しました。三時間余りの幸せな時間でした。

広島に音楽の専用ホールができ、そこでオペラが上演されるのが私の願いです。

抽斗のチケツト探す残暑かな

秋の風リネンのシャツを通りたる

観劇へ大通り行き夾竹桃

チェンバロの譜面煌々秋の音

秋めくと指揮の手の甲波打てり

八月やブラボーの声飛び交ひて

幕間に調律をする秋の昼

紅薔薇や歌手のかつらの重たさう

文月の幕ゆつくりと下りにけり

オペラ果つ秋の噴水高々と

《作品鑑賞》

溝田ちどり

クラシックに疎い私は、亜矢さんの音楽を題材とした俳句をいつも楽しく拝読している。今回は、「フィガロの結婚」の鑑賞の俳句。抽斗という身近な世界から夾竹桃の咲く大通りを経て劇場の世界へと引き込まれていく。

チェンバロの譜面煌々秋の音

八月やブラボーの声飛び交ひて

私の好きなチェンバロに秋の気配を感じる。指揮が激しくなり歌声の掛け合いが最高潮に達する場面で、八月の季語はぴったり。

紅薔薇や歌手のかつらの重たさう

文月の幕ゆつくりと下りにけり

歌手の重そうなかつらと紅薔薇の取り合わせがなんとも絶妙。終演の幕引きとともに文月もすっかり終わる。

オペラ果つ秋の噴水高々と

幕路に就く大通りの秋の噴水と作者の胸の高なりが聞こえてくる。この作品の鑑賞を通して晴々しい気持ちで秋を迎えられそうだ。